
こうきくとたまきちゃん

深縁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こつきくとたまきちゃん

【Nコード】

N2263T

【作者名】

深縁

【あらすじ】

皇紀くんと珠姫ちゃんは、珠姫ちゃんが生まれた頃からいつも一緒。そんな2人の日常は、他の人から見たら日常というには遠いらしくて…。今日も2人は自分たちの日常を過ごします。

『皇帝と眠り姫の運命論』の2人の幼い時のお話です。ふと書きたくなったので、始めました。多分いろんな視点からのお話になると思います。そして、かなりの不定期になるかと思えます…。一応、1話ずつです。

よければ、お暇つぶしにお読みください。

ある昼下がりに（前書き）

やってしまいました。

想像してたら書きたくなつて、筆が進んでしまいました。

少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

ある昼下がりに

「みおちゃん」

「あら、皇ちゃん。こんにちは」

「こんにちは。ぼくね、みおちゃんにおねがいがあるんだけど」

「皇ちゃんが私にお願いって珍しいわね。どうしたの？珠姫は？」

ある日の昼下がりに、筒井漣は、お隣さんであって、親友の愛息子の訪問を受けていた。

「たまきはぼくのいえでねてるよ」

「ええ？…皇ちゃん何かあったの？」

漣の親友の愛息子の名前は宮ノ内皇紀。

漣の愛しい娘の大切な人だ。

いや、大切な人では言い表せないかもしれない。

大げさかもしれないが、生きている存在意義かもしれない。

そんな珠姫の大切な（生きがい？である）皇紀が、何やら珠姫を抜きで漣にお願いしたいことがあると言う。

漣は心の中で多少冷や汗をかきながら、表面上はいつも麗しいと人に評される笑顔を貼り付けていた。

（珠姫に内緒で願い事？珠姫〜皇ちゃんに何かしたの〜！）

お願いにしても、色々あると思うのだが、澁是最悪の想定を頭の中に描きながら、心で叫んでいた。

それというのも、澁の娘の珠姫は、生後半年にして初めて出会ってからこのかた、皇紀にべつたりで、一緒に居れるであろう最大限の時間をどこに行くにも離れずくっついていなのだ。

まだまだ行動範囲が狭い赤ん坊の時さえ、皇紀が目の前から居なくなれば泣いて泣いて泣きやまず、親友に頼んで連れて来てもらうこともしばしばだった。

いや、しばしばなんて生ぬるい。

毎日だった。

普通だったら皇紀がその生活に耐えられず、すぐにでも破綻してしまいそうな日々だったが、幼い頃から何故か珠姫に関して寛大な皇紀は、何も文句を言わず珠姫に接してきた。

これには澁も皇紀の母親である亜紀恵も首をひねるばかりであった。だが、澁はこの珠姫に関しては寛大な皇紀のおかげで救われたのは確かな事実だった。

なので、実は皇紀には頭が上がらなかつたりする。

ちよこちよここと皇紀の好きなお菓子や玩具などを献上したり…いや、袖の下みたいに渡して良好な関係を保とうと必死だった。

それ程に皇紀の存在は筒井家にとって重要なものだったのである。

さて、そんな皇紀が珠姫に内緒でお願い。

(とうとう珠姫に愛想でも尽かしたの?! やっぱり、この前の珠姫

が我慢できなくて幼稚園乱入が駄目だった！それとも、毎日皇ちゃん自らの手からしか朝食と夕食を食べない珠姫が駄目だったの！それともそれとも……い……いや……！！ありすぎて何が駄目だったのかも分からないわ……！！！？)

推してしかるべし。

自分の想像に先に締め上げられて白旗をあげそうになる。
何がなんだか分からなくなり、思わず皇紀の幼い小さな肩に手をかける。

「皇ちゃん！珠姫を見捨てないであげてっ！！！」

「え？」

「珠姫は皇ちゃんが大好きなの！皇ちゃんがいないと生きていけないのよ！！私に出来ることなら何でもするっ」

「落ち着いて～漣ちゃん」

ポカン

動転して捲くし立てる漣を止めたのは、皇紀の母親 亜紀恵であった。

手には丸められた新聞紙が握られていた。
どうもそれで頭をはたかれたようだった。

衝撃で我に返って、漣はソロソロと皇紀に視線を向ける。

「みおちゃん、だいじょうぶ？」

心配そうな瞳で見られて溲は尻尾を巻いて逃げ出したくなった。

（くっつ！皇ちゃんの方が大人みたいよ！！恥ずかしいっ！！？）

「はいはい、落ち着いてね？」

「あ、亜紀ちゃん」

心中でまだまだまだ動揺中なの分かるのか、亜紀恵に背中を優しく叩かれる。
ようやく動揺が少し収まる。

「皇ちゃん」

「なあに？ママ」

「ママが溲ちゃんにお願いしておいてあげるから、皇ちゃんは家に戻りなさい」

「え…でも…」

「皇ちゃんが側に居ないから、珠姫ちゃんが起きそつよ？まだちよつとしか寝てないからもう少し寝かせてあげて。皇ちゃんも一緒に少しお昼寝しなきゃいけないでしょ？」

「…わかった。ママおねがいしておいてね！みおちゃん、あとでね！…！」

珠姫が起きる。

その台詞に反応して、躊躇っていたはずの皇紀が頷いて隣にある自分の家に帰っていく。

帰り際に振られた手に無意識のうちに手を振り替えて、家の中に消えた皇紀を見たあと、溲は亜紀恵を振り向いた。

「亜紀ちゃん。どういうことなの？」

「落ち着いた？あの子たちだけ置いておくわけにもいけないから、あっちで話しましょ」

「…分かった」

すぐにでも話を聞きたかったが、そう言われてしまえば従わないわけにはいかない。

いかに皇紀がしっかり者でも、まだ4歳児なのだ。

亜紀恵の言葉は正論であった。

「お泊り保育？」

「そうなの」

「お泊り保育ってお泊り保育？」

「他にどんなお泊り保育があるの？」

「…」

「入園してから初めてなんだけど、幼稚園でね、みんなでお泊りするのよ」

「…それって皇ちゃんが1日居ないってこと？」

「1日ってことはないわね。夕方から集まって、一緒に夕ご飯を食べてみんなで寝る。そして朝ご飯を食べて帰る。半日くらいかしら？」

「でも皇ちゃんがその間居ないってことは一緒じゃない」

「そっいうことね」

「…」

軽い感じで頷かれて、ジト目になる。

夜だけなら問題はない。

しかし、夕ご飯、朝食の時に皇紀が居ない。

それが問題だった。

「それって参加しなきゃならないの？」

「皇ちゃんはお休みするって言ったわ」

「そっなの！なら」

「でも、私が行きなさいって言ったわ」

亜紀恵の台詞に澁は目を見開いた。

急な展開に理解が追いつかない。

「?!な、なんで…」

「そろそろ皇ちゃんに全部任せるのやめない？ていうか、4歳児にして皇ちゃんが珠姫ちゃんのお母さんみたいでちょっと未来が心配よ？」

「…」

「それに、このままじゃ、珠姫ちゃんの為にもならないわ。大きくなれば適度に離れると思っていたけど、余計にべったりになっていっている感じがするし。今回のお泊り保育はいい機会だと思うんだけど」

「…」

「別に全てを一気に無くすわけじゃないけど、お互いにもう少し自分の時間を作らせましょう？2人のために」

「…分かったわ」

「お泊り保育のときは、私も協力するから」

「本当に？」

「ええ！2人で珠姫ちゃんと皇ちゃんのために頑張りましょう？だって私たち2人のお母さんなんだもの！」

手を握られて、力強い笑みを向けられる。

漣は胸の奥にずっと隠していた。

皇紀にべつたりな珠姫。

そんな珠姫を嫌がるでもなく側に居させてくれる皇紀。珠姫の母として、色々思うところはあった。

しかし、日々の仕事の忙しさに、皇紀と亜紀恵に甘えて目を背けていた。

今の状態はよくないということに。

皇紀のお泊り保育。

亜紀恵は、これはいい機会だと言った。

そして、一緒に頑張ろうと。

握られた手をもう片方の手で握り返して笑い返した。

「頑張る。だから協力してね？」

「その意気よ！私と皇ちゃんがついてるから！！」

「…皇ちゃんも引き離す対象よね？」

「あら？うちの皇ちゃんを甘く見ないで頂戴！珠姫ちゃんのためなら何でもしてくれるんだから」
「…」

何か矛盾していないかと思いつながら、亜紀恵の勢いに流されて、漣は珠姫のために今回の機会に全力で挑むことを決めたのだった。

そして漣の奮闘は始まったのだった。

ある昼下がりに（後書き）

最初はコメディーのつもりで書いていたのですが、気付けばなんかシリアス？

…おかしいなあ。

何はともあれ、お付き合いくださり、ありがとうございました！

嵐通り過ぎし朝に

「皇ちゃん、おかえりなさい……」

「ただいま……。…ママ、どうしたの？めのしたに、くまさんがいるよ？」

「うふふ…そうなの。ママ、クマさん飼っちゃったのよ……」

問題なくお泊り保育を終えて、返ってきた愛息子に、亜紀恵は力ない顔で笑う。

皇紀の初めてのお泊り保育を機に、幼馴染である珠姫の皇紀離れ（母離れ？）を決行した次の日の朝であった。

亜紀恵の様子からお分かりのように、今回の機会は想像を軽く超えて、すごい嵐となった。
端的に言う。

泣く（大泣きだ。近所からの苦情が来なかったのが奇跡に近い……）。

食べない（夕食も朝ごはんも）。

そして極め付けが『寝ない』（幸いなことに、大泣きするのはやめてくれた……）だ。

亜紀恵は物事を軽く見すぎていたと、珍しく後悔していた。

幼い子ではあるから、やはり睡魔に負けてうつらうつらになったが、すぐ目を覚まし、ぐずったのである。

（今日が土曜日でよかったわ…。じゃないと、澪ちゃん死んでたかも…冗談じゃなく）

本日は土曜日。

珠姫の母親の澪も仕事がお休みであった。

もし休みでなければ、一睡も出来ずに憔悴した状態で出社しなければならなかったのだ。

澪のことを思いつつ、昨日の夕方からのことなど当分の間思い出したくないと思う亜紀恵であった。

「ママ〜」

皇紀に呼ばれて現実に立ち戻る。

そこにはそわそわとした皇紀が亜紀恵を見上げていた。

「どうしたの？」

「うんとね…」

珍しくも齒切れの悪い息子に、亜紀恵が首を傾げる。

「なあに？」

「たまきは？あいにいってもいい？」

「…」

おずおずと口を開いた皇紀の台詞に亜紀恵は戸惑う。

(ど、どうしたのかしら？いつもならお伺いなんてたててこないのに…)

期待のこもった目で見られるも、一向に返事をしないでいれば、皇紀の顔がどんどん曇っていく。

「…だめ？」

今にも雨が降り出しそうだ。

「ああ！ご、ごめんね？珠姫ちゃんに会いに行ってもいいわよ？」

慌てて返事をする、途端にお日様が雲の間からその顔を覗かせたかのように、皇紀の顔に笑みが上る。

その様子を見て、亜紀恵もさすがに理解する。

皇紀も口にして言わないが、珠姫に会えなくて寂しかったのだということが。

物分りのいい子といえど、皇紀はまだ4歳児だ。

ほっこりと亜紀恵の胸が温かくなり、笑みが上る。

「珠姫ちゃんも、皇ちゃんに会えなくて、泣いて泣いて大変だったわよ〜」

つい、ちらりと本音を零す。

皇紀が目を見開く。

「たいへんだ〜！ママ、ぼく、はやくたまきのとこいかなくちゃ！

「！」
「そうね。皇ちゃんと同じで頑張ったから、いっぱい褒めてあげなくちゃね？」

「…ぼく、がんばった？」

「うん。とくつても頑張ったわよ。さすが、ママとパパの息子！」

ギュッと抱きしめると、子ども特有の甲高い笑い声があがる。
亜紀恵と皇紀の愛情確認は簡単には終わらない。

「ギュツ、ギュツ、ギウ〜」と言いながら抱きしめる亜紀恵に、「くるしいよ〜」と文句を言いながらも、全然苦しそうじゃない皇紀のほほえましい光景が玄関先で続いた。

「さて、珠姫ちゃんも待ってるし、これくらいにしましょうか？」

「あ〜！もうママってば！ぼく、いそいでいかなきゃいけないの！！」

「あらあら？ママだけのせいなの？」

「…ちがうけどちがくない」

「詳しく聞きたいわね…でも、本当にそろそろ行ってあげないと、澪ちゃんも倒れちゃうわね」

「はやく、はやく〜」

家に入って、着ていた制服を脱がせる。

着替える服を用意している間に、皇紀に皇輔 父親を起こしてきてくれるように頼む。

裸で元気に部屋を飛び出していった皇紀を見送って、どの服にしようか悩んでいると、くぐもった悲鳴が隣の部屋から聞こえてきた。

どうやら人間爆弾と化した皇紀に強襲されたい。
クスクスと笑いながら選んだ服を出していると、笑い声と共に、部
屋のドアが開いた。

「亜紀恵さん：ひどくないかい？」

「おはよう。皇輔さん」

皇紀を抱えあげて姿を現したのは皇輔で、げっそりとした顔での登
場だった。

父親に抱え上げられて、更に高いところで揺らされて、皇紀は喜び
の声をあげる。

亜紀恵も構わず朝の挨拶をする。

「いいわね、皇ちゃん。はい、服着ましようね」

「うん！パパ、おろして」

「…」

情けない顔をした皇輔に、無言で降ろされる。

しかし、それを気にせず皇紀は出されていた服を順に着ていく。

上から下まで準備完了！

「ママ！」

キラキラと期待のこもった目で見られて、皇紀の望みを汲む。

「はあい。いってらっしゃい」

「いってきま〜す！」

お許しをもらった皇紀が、これまた弾丸のように部屋を飛び出して

いった。

廊下を走っていく音を聞きながら、昨日から張ったままだった緊張の糸が緩んで、「ふああ〜」と欠伸びが出てしまう。

「お疲れさま」

「と〜っても疲れたわ〜」

お互いに微笑んで、階下に降りる。

亜紀恵は寝てしまいたいと思いつつも、今回の騒動（？）の顛末を見ないことには寝てもいられないと、朝ごはんも昼ごはんの用意をするために、キッチンに入った。

昼ごはんも用意する理由は、自分がいつ寝ても大丈夫なようにだ。

「さて、どうなるかな？」

新聞片手にダイニングの椅子に座る皇輔の声に、冷蔵庫を開けて中身をチェックしていた亜紀恵は振り返る。

「それは何の心配もいらないわよ」

自信満々に言い切る。

呆れた顔をする夫に構わず、続ける。

「皇ちゃんは珠姫ちゃんにとって『ライナスの毛布』なんだもの」

嵐は過ぎ去り、宮ノ内家に戻った日常。

そして、筒井家に向かった皇紀は、未だ嵐吹き荒れる筒井家に日常をもたらすのか。

それはまた、違う機会にでも。

ドキドキワクワク。あなたの訪れお待ちしております。（前書き）

大変お久しぶりです。

前に感想を頂きまして、イベントはおいしいことをすっかり忘れておりました。

このイベントは絶対書くぞ！と決めて、自分自身にノルマを課していたのですが、なんとかクリアすることが出来ました。少しでも楽しんでいただけたらと思います。

ドキドキワクワク。あなたの訪れお待ちしております。

「皇くん！お願いっつ！！」

今、漣は必死だった。

皇紀の前に膝立ちになり、手と手を合わせていた。合わせた手に力が入っていく。

「みおちゃん。かおあげて？」

「ううん！皇くんがうんって言うてくれるまであげられないわ」

困ったような声が皇紀から聞こえてくるも、漣はどうしても皇紀の望むように顔を上げることが出来なかった。

「うちの息子を困らせないでちょうだいな」

ポコン。

予想していなかった衝撃に頭を震わせながら、「あれ？前にもこんなことなかったっけ？」と漣は思った。

拝むのをやめて背後をつかがえれば、丸めた新聞を持った亜紀絵が立っていた。

笑顔は笑顔だが、周りを包む雰囲気はただならぬものを放っているようで、漣の血の気はざーっと落ちていく。

澪は困っていた。

とっても困っていた。

でも、亜紀絵は怖いと感じていた。

ゴクリと唾を飲み込む。

亜紀絵が口を開く。

「ー」

「おかあさん」

声が発される前に幼い声がそれに割り込んだ。

「「めっ」でしょ！いまは、ぼくとみおちゃんがおはなししてるのよ。」

困った顔をしていると思つた皇紀は頬を膨らませて怒っていた。

亜紀絵も予想外の皇紀の反応に不穏な空気はあつという間に消えてしまう。

今度は何の含みもなく、亜紀絵が微笑んで口を開いた。

「あらあら。お母さん、皇紀が困っているのだと思っただけ、早とちりしちゃったのかしら？」

「ううん。こまっただのはほんとう」

「…」

軽くなった空気にほっと息を吐き出したのも数秒、またもや訪れる緊張。

パクパクと口を開けるが、声は出ず、皇紀を見るしかない。

「やっぱり困ってたんじゃないの」

「ううん…でも、こまっただのは、みおちゃんがんばるでぼくをおがんでいるのかがわからなかったからだよ？おねがいがあるのはわかったけど、なにをおねがいしてるのかわからなかったから。…おねがいきいてあげたくても、ぼく、どうしていいのかわからないもの」

「…」
「漣ちゃん…」

「じ、ごめんなさい」

簡単に説明をしまえばこういうことだ。

漣は、皇紀に会いに宮ノ内家を訪れた。

皇紀を見かけるなり駆け寄り、目線を合わせるためにしゃがみ込む。皇紀が目を見開いて驚いてる間に、両手を目の前で合わせて頼み込みはじめた。

何をどうして欲しいのかの願いの内容も話さずに。

さすがの皇紀もこれには困った。

常々、母親に人からの頼まれ事は、内容も聞かずにほいほいと引き受けては駄目だと言われていたのだ。

母親との約束事を破ることの出来ない皇紀は、それ故に大層困っていたという事だったのである。

「ごめんね、皇くん…」

「だいじょうぶだよ。それでね、みおちゃんのおねがいつてなあに？」

「あ、あのね…明日の24日のことなんだけど…」

「クリスマスかいだね！明日は保育園お休みして朝からみおちゃんちいくよ」

「う、うん…」

「？」

何故か歯切れの悪い澁に皇紀が首を傾げる。

もごもごと口を動かして続きを言わない澁の前にいい香りのする力ツプが置かれた。

「こおら、澁ちゃん！はつきりと言っちゃいなさい。いつまでもグダグダした人のところにはいい事なんて起こらないわよ！！」

「！そ、それは困るっ！！」

「なら、さくさく言っちゃいなさいな」

「あう…皇くん」

「なあに？」

「！っ！！明日、珠姫のクリスマスプレゼントになってください！！？」

「……………え？」

「……………は？」

仲良く皇紀と亜紀絵の声が揃う。

澁は言いたいことを言い終えたのか、心なしか気の抜けた顔をして

いる。

「……ええと、ぼく……みおちゃんちのこになる？」

首を傾げて皇紀が聞けば、

「っ！む、無理！無理無理無理無理……！！皇紀はあげられませんっ！！？」

いつもの余裕と落ち着きはどつしたのかと言わんばかりに亜紀絵が叫んだ。

「うひっ！？」

亜紀絵の剣幕に溲は座ったソファから飛び上がった。飛び上がった拍子に、入れてもらったコップの中身が外へこぼれて机にちいさな水たまりを作ってしまった。

「ちよっ！お、落ち着いて！！」

「これが落ち着いていられますかっ！！うちの皇紀はあげません！

！！！」

「いや、べ、別に頂戴とは言ってな……」

「言っただじゃないの……！！？」

母の剣幕に呆然と見入っていた皇紀だが、我を取り戻してソファから立ち上がり、騒がしい居間をとつと出ていくのであった。

「落ち着きましたか、亜紀絵さん？」

「はい…」

「澪さんも？」

「はい…」

数分後、居間は落ち着いた状態を取り戻していた。しょんぼりと頭を落とす亜紀絵と澪。

その中間に近い場所に立つ皇輔。

「よろしい。ー皇紀、もう大丈夫だからおいで」

「わかった〜」

トコトコと部屋の入り口から現れた皇紀。

構図を見ればお分かりだろう。

皇紀は父ー皇輔を呼びに行ったのである。

祝日で休みだった皇輔は、2階にて読書中であつたのである。

「それで、皇紀に、珠姫ちゃんのクリスマスプレゼントになって欲しいとのことだったのだが、もう少し詳しく教えて欲しいのだが」

「はいっ！あの…」

ちらりと澪が皇紀を見る。

皇紀はそれに気づかなかつた。

何度か皇紀をみた後、澪は意を決して口を開いた。

「明日のクリスマスのために、サンタクロースに欲しいものをお願いすることになって、珠姫に何が欲しいか聞いたんです。そしてら
」

「…皇紀が欲しいと」

「そうなんです。珠姫にはそれは無理だと話したんですが、納得してくれなくて…仕方なくサンタクロースにお手紙を書いたんです」

「わあ！たまきもサンタさんにおてがみかいたんだ！」

「…そうなのよ、皇くん。でも、やっぱりサンタクロースでも皇くんは無理だつて返事が返ってきたから、珠姫に違うものを頼みましようつて言ったの」

「そうなんだ。それで、たまきはなにをたのんだの？」

「…」

「…」

「…」

皇紀が純真な瞳で大人たちを見る。

居たたまれなさそうに3人が身じろぎした。

「珠姫はね、”何もいらない”つて言うの」

「え？」

「皇くん以外は”いらない”つて」

「…え、と」

皇紀はぼかんとした顔をして、その後、頬をポリポリと掻いた。

そこまで珠姫に求められていることに、皇紀もちょっと照れたようだった。

「でも、クリスマスプレゼントないと悲しいでしょ？」

「うん。そうだね」

「だから、無理を承知で、皇くんには明日は1日、プレゼントとして珠姫のところにて欲しいの」

「どうやって珠姫のクリスマスプレゼントになるの？」

「珠姫が今日寝てしまってから皇くんはうちに来てもらって珠姫のところまで寝てちょうだい。それで、朝起きた珠姫にある言葉を言うて」

「なんていうの？」

「『メリークリスマス！』… やってもらえるかな？」

「うんっ！いいよ！！」

そんなことならお安いご用と皇紀は笑顔で頷いた。大人たちはほっとひといきついて笑顔になった。

待ちに待ったクリスマス。

みんなに笑顔が訪れますように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2263t/>

こうきくとたまきちゃん

2011年12月24日01時59分発行